建築家マックス・ヒンデルの経歴と作品について

A BIOGRAPHY OF MAX HINDER, ARCHITECT, AND HIS WORKS

角 幸博*

Yukihiro KADO

Max Hinder(1887-1963), a Swiss architect, was born in Zurich on 20th of January, 1887. In 1924, after pursuing his career as an architect in Switzerland, Germany, Austria etc., he came to Japan. He resided in Sapporo for three and half years till 1927, where he worked on numerous houses including his own, two mountain huts, two missionary schools-the Fuji(1924) and the Hokusei(1929), the St. Franciscan monastery(1925), a cathedral in Niigata(1927) and other buildings, besides proposed a project for the architectural competition for the erection of a LEAGUE OF NATIONS BUILDING AT GENEVA in 1926. He moved to Yokohama in 1927 and continued his work untill the year of 1940, when he went to Germany. During these thirteen years, he designed the Jochi University(1931) and the St. Mary Hospital(1931) at Tokyo, a cathedral in Utsunomiya(1932) and others. He closed his earthly pilgrimage in Regen, a small town of Germany, in 1963.

Keywords: Max Hinder, architect, modern architecture, Switzerland, Hokkaido, Yokohama

マックス・ヒンデル、建築家、近代建築、スイス、北海道、横浜

写真1 来札当時(1924年)のM.ヒンデル(岡部洋子氏蔵)

1. はじめに

マックス・ヒンデル¹ Max Hinder(1887-1963)は、大正末から昭和初期にかけて札幌市に滞在したスイス人建築家である。1924年来道、3年半の札幌市滞在後、横浜市に移住し、1935年事務所解散まで在日外国人建築家として活躍した。ヒンデルが札幌で活躍した頃の北海道建築界は、北海道庁や主要都市、北海道帝国大学など、官庁営繕組織や営繕技術者達が主流を占め、加えて大規模な商業施設などに道外の建築家や建築事務所の作品が見られたが、一方で田上義也²など、組織に属さず、かつ職能に自覚的な自営建築家が来道し、北海道に根をおろした時期でもあった。

本稿は、北海道における自営建築家の黎明期に活躍した建築家の一人であるヒンデルをとりあげ、その経歴と作品活動について論じたものである。これまで経歴概要³や個々の作品については断片的に報告⁴しているが、その後の調査により新たに知見を得た点があるので、あ

* 北海道大学工学部建築工学科 助手

Research Assoc., Dept. of Architecture, Faculty of Engineering, Hokkaido Univ.

らためて報告しておきたい。なお、来日以前の経歴や家系については子息ハンス・ヒンデル Hans Hinder⁵ 氏の教示により、また来日以降の作品活動については、ヒンデル直筆の裏書き付き写真(ハンス氏所蔵)を基本史料に、関係者からの聞き取り、遺存設計図書、契約書による確認、カトリック新聞⁶ 記事調査などを根拠とした。

2. 来日以前の経歴と家系

ヒンデルは、1887年1月20日スイスのフルンテルンFluntern自治区のZürichbergstrasse 104で生まれた。フルンテルンは、1894年にチューリッヒ市の一部となったが、当時はチューリッヒ近隣の自治区selbständige Nachbargemeindeであったという⁷。

父は、ルドルフRudolf Hinder(1864-1943)、母はエミリー・シェーネンベルガーEmilie Schönnenberg(1863-1900)、3人兄妹の長男として誕生し、マックス・ルドルフ・ヒンデル Max Rudolf Hinderと命名された。2人の妹は、エミリーEmilieとルイズ Louise(1891-1985)といった。ルイズは、のち北海道大学予科ドイツ語教授ハンス・コラー⁸ Hans Koller夫人となった人であり、ヒンデルに札幌行を勧めた人である。

ヒンデル家は、15世紀以来、トゥールガウ Thurgau州の小村ヴィレン Wilenで代々農業を営んでいたが、祖父グレゴール・パン克蘭ツ Gregor Pankranz Hinder II(1833-1878)の時代、1845年にチューリッヒへ移転し、商人となった。父のルドルフは、教師務めの後、チューリッヒ市の社会福祉局 Fursorgeamt上級公務員となった人である⁷。

母方も、チューリッヒ湖に近いヘルリンベルグ Herrlibergという町で18世紀まで農家を営んできた家系であった。ヒンデルは、こうした素性を恥じ、「父は、南ド

イツの貴族出身、母はフランス旧家の出身」との虚言すら創作したという。もちろん一族からは、趣味の悪い冗談と、大いにひんしゆくをかったが、自分の出生を飾りたてようとするヒンデルの見栄張りの性格の一面を示すエピソードといえる⁷。

図1は、ハンス Hans Hinder(1909年生まれ)氏が作成したヒンデル家の家系で、17世紀までたどることができる。

マックスは、1887年チューリッヒの小学校に入学、1903年16歳で下級ギムナジウムUntergymnasium卒業後、チューリッヒのBischof & Wandele、チロンChilonのSchmidt & Rossetのもとで、4年間製図訓練Bauzeichnerlehreを受けた⁹。

当時、建築教育を特別受けずに建築家をめざす者は、一般には最初の数年間Bauzeichnerlehreを修得し、その後事務所を巡って技術を習得する過程をたどった¹⁰。著名な建築家のもとには、多くの人間が集まり、競技設計Wettbewerbeに参加するなどして腕を磨いたのである。競技設計で成功した者は、建築家“Architekt”として独立したわけで、必ずしも建築教育を受ける必要はなかったし、この名称にしても明確な基準があったわけではなかった¹⁰。一方で“Diplom-Architekt”という称号がある。大学で建築教育Architekturstudiumを10-2semesters(学期)終了し、卒業試験Diplom-Abschlußprüfungに合格した者である¹⁰。ヒンデルの場合は、前者の過程を経て建築家として独立したわけである。

1907年から14年に兵役につくまでの7年間は、さらにヨーロッパ各地の事務所を巡る修業時代であった。チューリッヒを皮切りに、ロールシャッハ Rorschach、アーラウAarau、クールChur、サン・モリッツ、ミュンヘン、ベルリン、パリ、ブリュッセルなど各地を放浪し、多くの競技設計で成功したと伝えられる¹⁰。ドイツ工作連盟

図1 ヒンデル家家系図(ハンス・ヒンデル氏作成)

の結成(1907)やドイツの建築家P. ベーレンスの活躍、ベルリンでF. L. ライトの最初の作品集の出版(1910)などがあった時代である。

この間1909年には、ハンスが誕生してまもなくマリア Maria Brennwald夫人(1884-1909)が他界している。

第1次世界大戦中、2年間スイス軍技術将校として兵役後¹¹、1916年チューリッヒで設計事務所を開設。作品としてはエブリAebli 邸などがあるという¹⁰。翌年ウィーンへ移って4年間過ごし、銀行などを手がけた¹²。1921年から2年間オーストリアのチロル地方に滞在し、ランデックLandeck近郊のグリーンGrinsに独立住宅を設計したり、“Liceum Alpinum”のためのプロジェクトを発表するなどした¹⁰。

1924年1月義弟ハンス・コラー夫妻のすすめもあって、北海道に永住¹³する決心で、アニーAnny夫人を伴いマルセイユから乗船した。日本へ到着したのは同年3月であった。この船には、後に施主となる柳壮一夫妻も偶然同乗していた¹⁴という。

3. 札幌時代 (1924-27)

北海道永住の決意は、わずか3年半でくつがえされることになるが、札幌市での滞在期間中、柳壮一や、山崎春雄、大野精七、アーノルド・グブラー Arnold Gublerら北海道大学教授連と交わり、彼らのパトロネージを受けながら、精力的に設計活動を行なった。

札幌市内では、札幌藤高等女学校(1924)、北星女学校女教師館(1926)、パラダイス・ヒュッテ (1926, 1994年倒壊)、ヘルヴェチア・ヒュッテ (1927)などの現存作品

をはじめ、札幌藤高等女学校寄宿舎(1927)、北星女学校寄宿舎(1926)、聖フランシスコ修道院(1925)、フランシスコ会神学校(1926)や住宅作品(7棟)などがある。函館天使の聖母トラピスチヌ修道院(1927)、新潟カトリック教会(1927)、日本基督教会札幌教会案(1927)、上智大学基本案 (1927)などもこの期のものである。

来札当初、コラー家に身を寄せたが、その年札幌市北11条東1丁目に自邸「東光園円い家」¹⁵(写真2)と呼ぶ16角形平面の木造2階建て住宅を建設し、事務所を併設した。札幌における設計活動の第1歩である。屋根頂部に風見をつけ、こけら張り外壁のこの住宅は、「北海道建築にひとつのヒントを与えるもの」¹⁶として評価され新聞にもとりあげられた¹⁰。ここでは、日本人所員楽間利一郎、書生、女中を雇用していた。

同年札幌藤高等女学校(写真3)を設計、切妻大屋根を強調する意匠や、裾広がり急勾配屋根が特徴的で、破風に小さな小屋裏採光用丸窓をみせる。その後の作品によく登場する意匠のひとつであった。主棟中央の小塔もヒンデル好みのモチーフの一つで、北星女学校案(1928)や上智大学案(1927)などの基本設計でもみられた。

翌1925年「円い家」のすぐ北側に2番目の自邸を建設した。同年来札したグブラーに「円い家」を売却したためであるが、ヒンデル自身満足できる作品ではなかった¹⁷という。この年、柳邸(写真4)、大野邸(写真5)、山崎邸、林邸など、一連の木造住宅を設計した。イチイなどの丸太杭9尺程度のものを10数本も地面に打ち込むといった慎重な構造的配慮、外壁をこけら張りや亜鉛鉄板張りとする独特の防寒処理、引き戸や引き違い窓といった和風建具の採用、通風換気の工夫としての床下開放、

写真2 東光園円い家(1924)

写真3 札幌藤高等女学校(1924)

写真4 柳壮一邸(1925)

写真5 大野精七邸(1925)

写真6 ジュネーブ国際聯盟会館案(1926)

写真7 ヘルヴェチアヒュッテ(1927)(山崎英雄氏蔵)

フレードルーフ（屋根勾配を軒近くで緩勾配とする裾広りの屋根）など、共通の特徴がみられる。

平面でも、居間・食堂・台所・ユーティリティの一連の空間処理、南面するサロン・居間など団らんの場の重視、主婦室や居間における主婦空間の確保、個室群の確立など、近代住宅思想が展開されていた。

設計・管理に言葉の障害のあったことは想像に難くないが、「札幌の材料を思いがけぬことに使うので、その道の人はおどろいた」¹⁸ ことなど、大工との間の意志疎通にも苦労が伴ったことであろう。

気短かな性格であったというが、建築家としての使命感と固い信念を持っていたことは、小論『新らしく家を建てる人々へ』¹⁹ からもうかがうことができる。建築家の職能の未確立、同職能への一般の無理解といった当時の状況をふまえると、「建築に関する計画及監督は建築家に一任すべきである」と結論し、住宅を建てる際の施主の心構えや、「建築家は、医師・裁判官・社会学者と同一である」「医師と同様建築家を信頼せよ」「真の建築家は又金銭さえ貰えば如何なる要求にも応ずる奴僕ではない」など、建築家の職能について一般読者への啓蒙に努めたことは特筆すべきことであろう。

設計についても、自邸円い家が『雪國に相応しい新しい建築』¹⁸ として取材された際に語った記事によれば、建築には樹木をとり入れることが建築の生命であること、日本の伝統的な住宅は北海道の冬には適さないため、屋根を簡単に急傾斜のものとし、日を南から入れるようにするなど、北国の設計条件を入れた北海道向きの建築をつくるべきであることを唱えている。鬼門などの家相を戒める一方で、当時の日本建築界における「コンクリートの函が顔に建つ」¹⁸ 傾向を「洵に心ない業です」¹⁸ と憂い、「何故日本建築のいい所をとり入れて日本独特の建築を造らないか」¹⁸ と「模倣好きの日本人に対して」¹⁸ 疑問を投げかけている。

1926年には、北星女学校寄宿舎・同女教師館、パラダイス・ヒュッテなどの作品がある。北星女学校の寄宿舎、教師館は、1923年付けヴォーリズの基本案を受けての設計であったが、教師館の平面こそ酷似しているものの、外壁をからし色の鉄板張りとし、藤高等女学校やフランスコ修道院、大野邸などと類似のヒンデル風といえる仕上げとしている。

パラダイス・ヒュッテは北大スキー部15周年事業として計画されたもので、ヒンデルも無償で協力した。日本初のスイス式山小屋ともいわれる²⁰ グキャビンである。のちのヘルヴェチア(1927)、秩父宮殿下ヒュッテ(1928)と並ぶスキーヒュッテ3部作の第1号であり、その後の札幌近郊のスキーヒュッテブームに大きな影響を与えるものであった。

この年にはまた、1926年7月25日を期して全世界の連

盟国の建築家に対して呼びかけられ、翌27年1月25日を締切期限とするジュネーブ国際聯盟会館競技設計への応募案(写真6)も残されている。透視図と配置図写真が残るのみであるが、透視図は総会会議場を描いたものと考えられる。半円アーチ窓をみせるルスチカ仕上げの下層部と上部4層とで構成し、彫りの深い軒コーニスが頭部を引き締める古典的な意匠で、主棟の中央頂部には手をつないだ人形彫像を掲げている。

翌1927年、天使の聖母トラピスチヌ修道院（函館市湯川）、新潟カトリック教会、日本基督教会札幌教会案などの宗教建築や札幌藤女学校寄宿舎、ノートン邸、ヘルヴェチア・ヒュッテを中心に、上智大学の基本設計も始まった。

日本基督教会札幌教会の設計は、北海道大学農学部林学科教授新島善直を通じて依頼されたもので、同時に北大水産専門部主事佐々茂雄の紹介で、若い田上義也にも依頼された。いわば2者による指名競技設計である。ヒンデル案は残されていないが、A-1版程の額1枚に透視図を描いたもので、木造1階建切妻屋根の簡単なものであった²¹。設計費2,000円ということで教会側が難色を示し、結局田上案が採用されることになる。

ヘルヴェチア・ヒュッテ(写真7)は、ヒンデルとグブラーの共同出資により建てられた。ヘルヴェチアHelvetiaは両者の命名で、スイスの古名、スイスを代表する女神の名でもある²²。8坪の小さなログキャビンで、外壁を桎張り仕上げとした小屋であるが、札幌時代の最後を飾る作品で、ヒンデル自らが「王宮を建てたよりもヘルヴェチアヒュッテの建設が自分には深い喜悅であった」²²と述べている。

4. 横浜時代(1927-40)以降

1927年10月、ヒンデルは、現在の横浜市中区本牧満坂253で設計事務所を開設した。この自邸兼事務所は、ドイツ人弁護士邸として現存し、当初のこけら張り外壁から下見板張りへの変更を受けているものの、木造2階建ての概形はよく保たれており、居間部分への採光配慮、ヒンデル好みの引違い建具の採用など、札幌時代の住宅作品との共通点がみられる。

北海道永住の志を捨て、移転を決心した動機には、25年1月29日のコラーの死去や、同年3月頃のコラー未亡人スイス帰国などがあげられるが、より広い活動領域を求めての転出とも考えられる。

新潟カトリック教会堂は、ヒンデルの横浜移転と同年の1927年9月18日献堂式を挙げるが、竣工絵葉書の全景写真の下には、「マックス ヒンデル 建築設計（横浜・札幌）」とあり、すでに横浜転出の準備が行われていたことがうかがえる。

横浜事務所では、札幌事務所開設以来のチーフ楽間利一郎、札幌から転居した竹内一次のほか、鈴木熊作、川喜田一雄らが勤めていた²³。川喜田(1903.12.20-1988.7.23)は、1921年県立神奈川工業学校卒業後、同年横浜市技手補として勤務、1924年神奈川県庁警察部で建築申請事務を扱っていた²³が、1929年1月から所員として、事務所解散(1935年)まで勤めた一人である。

この期には、札幌の北星女学校校舎(1929)、秩父宮殿下ヒュッテ(現空沼小屋, 1928)、横浜の旭シルク櫛住宅(司令官ハウス, 1927, 写真8)、名古屋の熱田天主公会(1929)、恵方町天主公会(1931)、岐阜天主公会(1929)、同幼稚園(1930)、金沢聖霊病院附属聖堂(1931)など木造建築のほか、東京の上智大学(1931, 写真9)、聖母病院(1931)、名古屋南山中学校本館(1932, 写真10)、宇都宮天主公会(1932, 写真11)などのRC造の作品がみられる。これらRC造の作品は、シャープなデザインを意識しながらも、どこことなく重く、部分的に装飾的な扱いを見せるなど、ヒンデルの作風的一端を見る上で注目される作品群といえることができる。

この期の多くの作品活動では、新潟教会の設計を通じて出会ったドイツ人ライネルス Joseph Reiners(1874-1945)神父の存在を無視できない。ライネルスは、1912年新潟教区長に就任、1922年から臨時名古屋教区長を兼任、1926年名古屋区教区長に就任した人物であり、南山中学校のほか、熱田、恵方町、岐阜、金沢の会堂建設の際に、いずれもヒンデルを起用している。

ヒンデルの教会堂は、宇都宮天主公会に代表されるように、双塔ないし単塔を擁したロマネスク風意匠のものも多く、内部にも半円アーチの多用、彫刻を施した方

円柱頭飾りの採用などがみられるが、宇都宮では大谷石の採用、金沢聖霊病院附属聖堂では内部柱に黒漆塗りを採用するなど、地域性を考慮した部分もみられる。クリアストーリーに見られる円窓は、ヒンデルが好んで採用したもので、熱田、恵方町、岐阜、金沢などの会堂で共通してみられるものであった。

設計活動のほか、ドイツ東洋文化研究協会(OAG: Deutsche Gesellschaft für Natur und Völkerkunde Ostasiens)の委員会員としても活動し、OAG便り“Nachrichten der OAG”にもしばしば名前がみられたという²⁴。

1929年1月の同協会における講演では、“Japanische Bausitten”(日本の建築風習)²⁵と題し、家相から地鎮祭、地曳之式、新初之式、上棟之式など建築に関わる風習や祭事について言及しており、日本文化を深く理解しようとしたヒンデルの一面をうかがうことができる。

1935年5月31日事務所を解散²⁶し、翌36年4月1日にはOAGを脱会、第2次世界大戦のさしせまった1939年最後のヘルヴェチア行のために来札(写真12)し、1940年戦争まただ中のドイツへと出発した。

ドイツ、バイエルン地方レーゲン Regenを最後の郷里と決め、1年間実業学校の教師を務めたこと以外、この期についての詳細は不明である。1963年1月末、レーゲンで76歳の生涯を閉じ²⁷、同地の共同墓地の一面に埋葬された。ヒンデルにふさわしい素朴な木製十字架の墓標には、「20.1.1887/M. R. HINDER/ARCHITEKT」²⁸と記されている。

5. むすび

写真8 旭シルク櫛住宅(1928)

写真9 上智大学(1932)

写真10 南山中学校本館(1932) (南山学園蔵)

写真11 宇都宮天主公会(1932) (吉田勝夫氏蔵)

写真12 離日前(1939年)のヒンデル
(山崎泰雄氏蔵)

表 1 M. ヒンデル年譜

年次	年齢	経 歴	作 品	
			一 般 建 築	カトリック系宗教施設
1887 明治20		1.20 チューリッヒで誕生		
1893 明治26	6	チューリッヒの小学校入学		
1903 明治36	16	チューリッヒの下級ギムナジウム終了 チューリッヒの BISCHOF & WANDELE および チロンの SCHMIDT & ROSSET のもとで BAUZEICHNERLEHRE (図面訓練)		
1907 明治40	20	チューリッヒ、ローザンヌ、チューラウ、 クール、サンモリッツ、ミュンヘン、 ベルリン、パリ、ブリュッセルなど放浪 (~1914) この間、多くの Wettbewerbe (設計競技) で成功		
1914 大正3	27	スイス建築術士官として兵役(~1916)		
1916 大正5	29	チューリッヒに設計事務所開設	AEBLI 邸	
1917 大正6	30	ウィーンに滞在(~1921)		
1921 大正10	34	オーストリア チロル地方滞在	"Liceum Alpinum" のためのプロジェクト	
1924 大正13	37	1.- マルセイユ出発 3.- 横浜到着	邸 自邸「東光園内い家」(~1967.2.-)(札幌市北11東1) ☆	9.28*札幌高等女学校上棟式(札幌市北16西2) 施工:松川三浦建築工務所(三浦才三) 1932.2.2一部焼失, 3.5復旧工事ほぼ終了 ☆
1925 大正14	38	12.13「新しく家を建てる人々へ」(北海タイムス) 12.20まで5回にわたり連載	7.3 柳 莊一郎(~1971頃)(札幌市北4西15) 施工:長谷川 清四郎他 ○ ☆ 11.15 山崎 春雄邸(~1973)(札幌市北4西15) 棟梁:佐々木某 ○ 邸 大野 菊七郎(~1960)(札幌市北12東2) 施工:沖津組(監理, 林 清) ☆ 自邸(2次, 札幌市北11東1) ☆ 林邸(札幌市) ☆	11.19 聖ラザルス修道院落成式(~1982)(札幌市北11東2) 施工:松川三浦建築工務所 ☆
1926 大正15	39		9.- 奥田歯科医院(~1946)(札幌市南4西4) 棟梁:長谷川清四郎 11.22 パラダイスヒュッテ(~1994)(札幌市手稲山) ○ 12.21*北星女学校女教師館(札幌市南5西17) 施工:松川三浦工務所 ☆ 邸 ジュネーブ国際同盟会館競技設計案 ☆	邸 ラザルスコ会神学校(~1960頃)(札幌市北11東2)
1927 昭和2	40		1.15 北星女学校寄宿舎献堂式(~1974.11.)(札幌市南5西17) 施工:松川三浦工務所 ○ 9.13*ヘルヴェチアヒュッテ(札幌市) 詔負:水本小判治, 大工:田頭 邸 日本基督教教会札幌教会堂 ノートン邸(札幌市南15西8) ☆ *横浜自邸(現ボンデルホフ邸)(横浜市中区本牧鶴坂253) ☆	7.5*天使の聖母ドラビスタ修道院落成献堂式(函館市上湯川) ○ 9.18*新潟天主教会献堂式(新潟市東大畑通) 施工:コンクリート工業 ○ ☆ 10.1 札幌高等女学校寄宿舎(~1963)(札幌市北16西3) 施工:松川三浦建築工務所 ☆
1928 昭和3	41	10.- 横浜市本牧鶴坂253へ移転 事務所開設	4.- 北星女学校校舎 ○ 10.27 旭シルク端住宅(司令官ハウス)(横浜市中区本牧123) ☆ 12.10*秩父宮殿下ヒュッテ(現空沼小屋)(札幌市)	2.15 熱田天主教会献堂式(~1945)(名古屋市熱田区) 施工:若永伊勢松他
1929 昭和4	42	1.8 ドイツ東洋文化研究協会 OAG における 講演 "Japanische Bausitten" (日本の建築風習)	6.29 OAG 会館改修起工(旧東京府麹町区平川町) 1930. 工竣工 12.2 北星女学校校舎工事終了式(~1963)(札幌市南5西17) 施工:松浦組 ○	2.28 岐阜天主教会献堂式(~1945)(岐阜市西野町) 施工:若永伊勢松他
1930 昭和5	43			5.1 岐阜天主教会附属幼稚園開園式(~1945)(岐阜市西野町)
1931 昭和6	44			6.21 恵方町天主教会(名古屋市恵方町)(~1989) ○ 11.12*金沢聖霊病院附属聖堂(金沢天主教会)(金沢市長町1) 施工:若永伊勢松 ○ 12.15*聖母病院祝別・開院式(東京都新宿区中落合) 詔負:宮内初太郎 ○
1932 昭和7	45			2.28*南山中学校本館(名古屋市昭和区五軒屋町) 施工:大倉土木 ○ 6.12*上智大学(現1号館, 東京都千代田区紀尾井町) 施工:木田組 ○ 8.4*三本木天主教会(十和田市カトリック教会) 献堂式(十和田市稲生町12) 施工:宮内初太郎 ○ 11.23*宇都宮天主教会(カトリック松が峰教会) 聖別式(宇都宮市松が峰) 施工:宮内初太郎 ○
1934 昭和9	47			2.20 聖母病院第2期増築工事(東京都新宿区中落合) 詔負:山村力松 ○ 4.30 聖母病院看護室第2期工事(同上) 詔負:山村力松、梅本敏之 ○
1935 昭和10	48	5.31 事務所解散		
1936 昭和11	49	OAG の委員会脱退		
1939 昭和14	52	8.5 ヘルヴェチアヒュッテ(札幌市) 行		
1940 昭和15	53	ドイツへ出発、バイエルン地方レーゲン 滞在、実業学校教師を1年間務める		
1963 昭和38	76	レーゲンにて没		

* 現存作品 ○ 設計図書, 契約書などで特定できるもの ☆ ハンス氏提供写真のあるもの

以上概説してきたマックス・ヒンデルの経歴と作品活動を年譜としたのが、表1である。表中、設計図書、契約書などの史料で特定できるものについては○印で示している。

本稿では、滞在期間の短い札幌時代にやや重きを置いた。札幌では、北海道大学教授連との交流を通じてヒンデルの人物像がよく伝えられていること、スイスに似た札幌の気候風土を意識した設計姿勢、建築家の職能に関する新聞への投稿など、ヒンデルの建築観、意識をみていく上で、重要と考えたからである。この期の作品としては、こけら張りや鉄板張りの防寒構造の木造住宅(7)を中心に、ヒュッテ3、学校(寄宿舎を含む)4、カトリック教会・修道院(神学校を含む)4、医院1のほか、日本基督教会札幌教会案やジュネーブ国際連盟会館競技設計案などを明らかにすることができた。

横浜時代には、1935年の事務所解散まで、住宅2、ヒュッテ1、カトリック教会・付属施設6、会館1、病院(増築工事も含める)1、学校3などの作品を残したが、カトリック系宗教施設の多い点が目を引く。特に、新潟、岐阜、名古屋、金沢などのカトリック教会設計にあたっては、名古屋教区長を勤めたライネルス神父との交流が大きく影響しており、その多くは、ロマネスク様式を意識的に採用したものであった。さらに、南山中学校本館、上智大学、聖母病院などRC造の作品群もヒンデルの作風を見ていく上で注目されるが、本稿は、ヒンデルの作品経歴を中心にまとめることに主眼を置いたため、個々の作品分析やヒンデルの作風などについて、多くふれることができなかった。この点については、あらためて別稿に譲ることとしておきたい。

謝辞

来日前の経歴および離日後の消息については、チューリッヒ在の子息ハンス・ヒンデル氏との往復書簡によって多くを得ることができた。在日中の経歴については、アーノルド・グブラー氏をはじめとするヒンデルの友人知人の方々、個々の作品については関係者の方々に多大な協力をいただいた。さらに、横浜開港資料館堀勇良博士、名城大学理工学部畔柳武司氏には、資料提供や作品調査などで多くのご教示をいただいた。また本稿作成にあたり玉木大樹、星野貴両君(北海道大学大学院)に協力いただいた。ここに記して、感謝の意を表します。

注記

1. Hinderはヒンダーと表記する方が一般的であるし、交遊関係のあった人々も「ヒンダーさん」と呼んでいるが、1925年12月13日からの連載記事の署名では「ヒンデル」とあり、また自身の事務所印やサインではすべて「ヒンデル」と記載しているので、本稿ではそれに従った。

2. 1899-1991. 1918年F. L. ライト設計の帝国ホテルの建設事務所に勤務後、1923年の関東大震災を契機に北海道へ渡る。戦前期の作品数約160件のうち半数以上が住宅である。製作姿勢にはライトの建築精神を生かしつつ、意識的にライト風から脱却し、独自の作風を見出す努力がみられる。拙稿『田上義也の初期作品について』(日本建築学会大会学術梗概集, 1985)、『大竹虎雄別邸(1922)について(田上義也研究3)』(前同, 1991)など参照。
3. 拙稿『建築家マックス・ヒンデルについて』(日本建築学会大会学術梗概集, 1978)、『建築家マックス・ヒンデル MAX HINDERの経歴について』(北海道大学工学部研究報告 第83号 1977)など。
4. 拙稿『建築家マックス・ヒンデルMAX HINDER-3 一名古屋南山中学校について』(日本建築学会北海道支部研究報告集 No.50, 1979)、『建築家マックス ヒンデル MAX HINDER 3つのSki Hütteについて』(日本建築学会大会学術梗概集, 1980)、『北星学園女教師館(大正15年)について』(同前, 1981)、『宇都宮カトリック教会(1932)について』(同前, 1982)ほか。
5. 1909-。マックス・ヒンデルの先妻マリア夫人との間に生まれた子息。1928年から'30年にかけて、上智大学の設計・監理に従事したが、父マックスと過ごしたのは在日の1年間だけであったという。
6. 1923年5月1日『カトリックタイムス』として創刊。1931年7月5日『日本カトリック新聞』と改称。
7. ハンス・ヒンデル氏1988年4月14日付け書簡による。
8. 1881.10.4-1925.1.29. 1908年より'25年まで、北海道帝国大学予科ドイツ語教師として在勤。
9. ハンス氏1976年3月13日付け書簡に、“Bauzeichnerlehre bei Schmid & Rosset in Chilon und bei Bischof & Weidele in Zürich.”とあるが、個人名か会社名か不明。
10. ハンス氏1976年3月13日付け書簡による。
11. 山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設(承前)」(『山とスキー』第79号 1928年)では、「世界大戦に奥国士官として従軍し負傷……」とあるが、ここでは前掲資料10)によった。
12. 山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(『山とスキー』第78号 1928年)13. 北海タイムス1925年12月13日記事「新しく家を建てる人々へ」に、「北海道を永遠の住家と定めて」とある。
14. 柳壮一の妻福子氏書簡1976年3月5日付けによる。
15. 北星女学校寄宿舎設計図には「札幌市東光園円イ家建築家ヒンデル」の印がある。
16. 北海タイムス 1925年10月30日-31日記事「雪國に相應しい新しい建築」
17. ハンス氏提供の写真裏に書かれていたヒンデル直筆の文による。
18. 柳壮一の妻福子氏書簡1976年3月5日付けによる。
19. 北海タイムス 1925年12月13日-20日。
20. 大野精七氏(1885.8.17-1978.9.5)談。
21. 日本基督教会札幌北一条教会役員、井口政治郎氏談。
22. 山崎春雄「ヘルヴェチアヒュッテの建設」(『山とスキー』第78号 1928年)
23. 横浜開港資料館堀勇良博士による1985年12月26日実施の川喜田一雄聞き取りメモによる。
24. アーノルド・グブラー氏1976年3月14日付け書簡による。
25. 社団法人OAGドイツ東洋文化研究協会会報 第22巻(1931)掲載。翻訳は、北海道大学文学部文化独文学講座藤本純子助手の協力を得た。
26. ヒンデルが1935年5月31日に事務所を解散するにあたり、1929年1月31日から所員として勤務した川喜田一雄に与えた証明書『證』が、瀬川喜田建築設計事務所川喜田敬忠氏のもとに保存されている。事務所解散後の所員の再就職または独立を懇念して記したものと考えられ、「事務所解散ニ至ルマデ最後ノ一人トシテ勤務セリ」から始まり、事務所で携わった仕事内容、上智大学建築工事監督などに従事したことなどを挙げ、「技能優秀ニシテ着実誠意ノ建築家タル事ヲ證シ大方ノ工事関係者諸氏ニ推薦スルモノナリ」と結んでいる。ただ、この証明書のヒンデル建築事務所の住所は、「東京都麹町区平河町式目七番地」とあり、事務所解散時には横浜から東京に本拠を移していたと考えられるが、この点については現在のところ確認されていない。
27. ハンス氏1976年3月13日付け書簡による。
28. 1984年9月現地調査による。

(1994年5月10日原稿受理, 1994年9月20日採用決定)